



東京大学
大和証券グループ本社
ダイムラー・クライスラー社
森ビル 株式会社

2005 年 8 月 14 日

プレスリリース

「ハーバード・アジア国際関係プロジェクト」東京での開催について

ハーバード大学がアジアで主催する公式行事としては最大の「ハーバード・アジア国際関係プロジェクト(HPAIR)」は第十四回目となる国際会議を、東京で始めて開催いたします。「ハーバード アジアビジネス会議(HABC)」の第二回アジア大会(HABCIA)も併設します。

本年は東京大学を共催校として、また企業スポンサーとして、大和証券グループ本社、ダイムラー・クライスラー社をプラチナスポンサーとして、他各社の協賛を得ております。また、森ビル株式会社を公式会場スポンサーとして、六本木ヒルズ内、アカデミーヒルズをメイン会場として開催します。

以下に、開催概要、及び講演者の一覧を付しております。メディア登録も下記の要領で受け付けており、世界各国から外交官、実務家、研究者、ビジネスエグゼクティブが講演者として 120 名、参加者として 40 数カ国から 800 名以上が参加する本会議に是非ご参加ください。

記

[開催日時] 2005 年 8 月 22 日 (月) から 26 日 (金)

[開催場所] 六本木ヒルズ アカデミーヒルズ 40、49 階 (22、23、26 日)
東京大学本郷キャンパス (24、25 日)

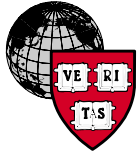
[会議の特徴]

主たる講演者として、以下。(敬称略、順不同)

※セキュリティの都合上、別段の表記なき講演日時は事務局まで直接お問い合わせください。

竹中平蔵 (内閣府特命担当大臣 (経済財政政策)・郵政民営化担当)、オンケンヨン (ASEAN 事務総長)、李秀赫 (Lee Soo-hyuck; 大韓民国前外交通商部次官補、六カ国協議韓国前代表、現駐独大使)、ベルント・フィッシャー (ドイツ駐日臨時代理大使)、エズラ・ヴォーゲル (ハーバード大学名誉教授)、リチャード・クーパー (ハーバード大学教授、元ホワイトハウス・国家情報会議議長)、有馬朗人 (前文部科学大臣、東京大学総長)、黒川清 (日本学術会議会長)、小宮山宏 (東京大学総長)、河合正弘 (東京大学教授)、田中明彦 (東京大学教授)、藤原帰一 (東京大学教授)、坪井栄孝 (日本医療機能評価機構理事長、日本医師会元会長)、国分良成 (慶應義塾大学教授)、井口泰 (関西学院大学)、ティエリー・ポルテ (新生銀行取締役代表執行役社長)、千本倅生 (eAccess 代表取締役会長兼 CEO)、伊佐山建志 (日産自動車副会長)、金田新 (トヨタ自動車専務)、リチャード・カッツ (オリエンタル・エコノミクス誌上級編集者)

他、合計約 110 名の講演者を招聘



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE - TOKYO, JAPAN

[メディア登録要綱]

事前登録は必要ありませんが、事務局まで一報頂ければ当日、メディア証を事前に準備させていただきます。

8月22日(月) 午前8:00 - 午前10:15 グランドハイアットホテル 宴会場 3階
午前10:30 - 午後5:00 アカデミーヒルズ 2階 入口受付
8月23日(火) 午前8:00 - 午後5:00 アカデミーヒルズ 2階 入口受付
8月24日(水) この日の取材・参加については事前に事務局までご連絡ください。
8月25日(木) 午前9:00 - 午後1:15 東京大学 安田講堂 受付
8月26日(金) 午前8:00 - 午後5:00 アカデミーヒルズ 2階 入口受付

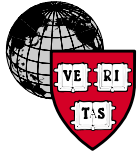
[事務局連絡先]

東京大学 HPAIR ホスト国準備委員会

TEL/FAX 03-5841-1058

佐橋亮、代表、 sahashi@hpair.org

銭谷恭子、メディア・プレス担当 zeniya@hpair.org



HPAIR 2005 東京会議の内容

(2005 年 8 月 10 日現在)

I. HPAIR 概要

Harvard Project for Asian and International Relations (通称 **HPAIR**) は、世界中の著名大学から集結した学生と政治、ビジネス、文化、学術といった幅広い分野の卓越した専門家を結ぶ橋渡しの機会として、1991 年に団体が設立されて以来、十数年にわたり毎年夏に開催しています。現在では、ハーバード大学のアジア・太平洋地域で開催される最大の公式行事であり、またアジア・太平洋地域においても最大規模の国際学生会議に成長しました。

過去のHPAIR会議開催地

14 年の組織の歴史を通じ、HPAIR は様々なアジアの主要都市と出会い、素晴らしい会議を開催することが出来ました。そして 2005 年、HPAIR は満を持して、世界が注目するダイナミックな都市「東京」へとその舞台を移し、初めて日本で会議を開催します。

《過去の開催都市一覧》

2005	東京	1998	クアラルンプール
2004	上海	1997	バンコク
2003	ソウル	1996	ソウル
2002	シドニー	1995	ジャカルタ
2001	シンガポール	1994	マニラ
2000	北京	1993	香港
1999	香港	1992	台北

II. HPAIR2005 東京会議

2005 年度の HPAIR 会議は、東京で 8 月 22 日 (月) ~26 日 (金) に開催されます。同期間中に、アカデミック、ビジネス双方の会議が開催され、世界各国から 900 名以上の学生や、企業の方々が参加されます。

《東京会議で開催されるイベントの詳細》

HPAIR 2005 アカデミック会議

日時及び開催場所： 2005 年 8 月 22 日~25 日

六本木ヒルズ内アカデミーヒルズ／東京大学

主催：ハーバード大学／東京大学

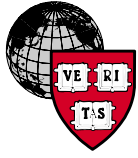
スポンサー：

プラチナスポンサー：大和証券／DaimlerChrysler

ゴールドスポンサー：森ビル株式会社／日本航空／バイエル (Bayer Medical Science)

スポンサー：デロイト(Deloitt)、三菱商事

参加者：世界中の多数の応募者の中から選抜された学部生・大学院生 700 名



1. 予定プログラム

1-1. 国際学術会議

1日目: 8月22日 六本木ヒルズ アカデミーヒルズ 40、49階

09:00-10:30 開会式 グランドハイアットホテル・グランドボールルーム

11:00-12:30 分科会 セッション1

12:30-13:30 昼食

13:30-15:00 分科会 セッション2

15:00-15:30 コーヒーブレイク

15:30-17:00 分科会 セッション3

2日目: 8月23日 六本木ヒルズ アカデミーヒルズ 40、49階

09:00-10:45 全体会議

11:00-12:30 分科会 セッション4

12:30-13:30 昼食

13:30-15:00 分科会 セッション5

15:00-15:30 コーヒーブレイク

15:30-17:00 分科会 セッション6

20:00-23:00 インターナショナル・ナイト (交流会)

3日目: 8月24日 東京大学本郷キャンパス

オプション1:

09:30-12:00 研究発表会1(コーヒーブレイク有)

12:00-13:00 昼食

13:00-17:00 研究発表会2(コーヒーブレイク有)

オプション2:

フィールドトリップ (終日)

4日目: 8月25日 東京大学本郷キャンパス

09:00-10:30 分科会 セッション7

10:45-13:15 全体会議

13:15-14:15 昼食

14:15-15:30 分科会 セッション8

15:30-15:45 コーヒーブレイク

15:45-17:00 分科会セッション9

20:00-23:00 ガラ・ディナー (祝賀会) 東京全日空ホテル

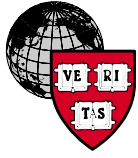
1-2. ビジネス会議

1日目: 8月25日 東京大学本郷キャンパス

10:45-13:15 全体会議

13:15-14:30 昼食

14:30-17:00 ケーススタディセッション



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE - TOKYO, JAPAN

2日目: 8月26日 六本木ヒルズ 40階 アカデミーヒルズ
09:30-10:20 基調講演 I ティエリー・ポルテ氏
10:35-12:15 パネルセッション I (パネル A、B、C)
12:20-13:55 ランチレセプション
14:00-15:45 パネルセッション II (パネル D、E、F)
16:00-16:50 基調講演 II 千本倅生氏
17:00-17:50 基調講演 III 竹中平蔵氏
20:00-22:00 クロージングレセプション

1-3. HPAIR 2005 特別行事

開会式（オープニングセレモニー）:

通常、開会式では開催国の政府関係者の方々にスピーチを頂いております。

日時及び開催場所: 2005年 8月22日 9:00am ~ グランドハイアットボールルーム

参加者: アカデミック会議の参加者、開催国の政府関係者・ビジネス界関係者・学会関係者、ハーバード大学卒業生

祝賀会（ガラ・ディナー）:

会議を締めくくる祝賀会では、主賓によるスピーチが執り行われます。

正装を身に纏い、本年の会議の閉会を祝うと共に、来年の会議の成功を願うべく祝杯をあげます。

日時: 2005年 8月25日 20:00 ~ 0:00

場所: 東京全日空ホテル 大宴会場

参加者: アカデミック会議の参加者、開催国の政府関係者・ビジネス界関係者・学会関係者、ハーバード大学卒業生

VIP レセプション

政府関係者やビジネス界、学会を代表する主賓が参加するレセプションです。

日時: 2005年 8月25日 18:00~20:00

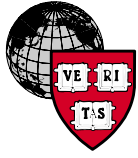
場所: ヒルズクラブ ジュピター

参加者: アカデミック・ビジネス会議の講演者、開催国の政府関係者・ビジネス界関係者・学会関係者、ハーバード大学卒業生

2. 主なスピーカー（敬称略）

<国際学術会議>

Ong Keng-Yong	ASEAN 事務局長
李秀赫(Lee Soo-hyuck)	大韓民国前外交通商部次官補、六カ国協議韓国前代表、駐独大使
Ezra Vogel	ハーバード大学・名誉教授
Richard Cooper	ハーバード大学・教授、元国家情報会議・議長
Susan Pharr	ハーバード大学・ライシャワー記念教授（日本研究）
有馬朗人	東京大学名誉教授、元文部大臣・科学技術庁長官・東京大学総長
小宮山宏	東京大学総長
黒川清	日本学術会議・会長、東京大学名誉教授
河合正弘	東京大学教授、元副財務官、世界銀行チーフエコノミスト



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE - TOKYO, JAPAN

<ビジネス会議>

竹中平蔵	内閣府特命担当大臣（経済財政政策）・郵政民営化担当
Thierry Porte	新生銀行代表執行役
千本倅生	eAccess 代表取締役会長兼 CEO

※以上のスピーカーが主として全体会議での講演を行う。また、日本を代表する政治家の基調講演を交差している。以下、各分科会所属のスピーカーを別に挙げる。（一部重複する、敬称略）

3. HPAIR 顧問

Ezra F. Vogel	<i>Chairman of the Board of Advisors</i> <i>Henry Ford II Professor of the Social Sciences</i>
Richard N. Cooper	<i>Maurits C. Boas Professor of International Economics</i> <i>Former Chairman, National Intelligence Council</i>
Carter J. Eckert	<i>Professor of Korean History</i> <i>Director of the Korea Institute</i>
Andrew Gordon	<i>Lee and Juliet Folger Fund Professor of History</i> <i>Chair of the Department of History</i>
Alastair Iain Johnston	<i>Governor James Albert Noe and Linda Noe Laine Professor of</i> <i>China in World Affairs</i>
William Kirby	<i>Edith and Benjamin Geisinger Professor of History</i> <i>Dean of the Faculty of Arts and Sciences</i>
Roderick MacFarquhar	<i>L.B. Williams Professor of History and Political Science</i> <i>Chair of the Department of Government</i>
Dwight H. Perkins	<i>Harold Hitchings Burbank Professor of Political Economy</i> <i>Director of the Asia Center</i>
Susan Pharr	<i>Edwin O. Reischauer Professor of Japanese Politics</i> <i>Director of the Reischauer Institute</i>
Anthony Saich	<i>Daewoo Professor of International Affairs</i> <i>Director of Asia Programs, Kennedy School of Government</i>
Richard Vietor	<i>Senator John Heinz Professor of the Environment</i> <i>Director of Asia Programs, Harvard Business School</i>

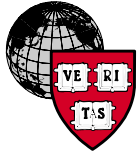
4. 会議内容

4-1. 国際学術会議の主な内容

分科会 1 – Security

<テーマ>

今日の東アジア地域は、冷戦期の安全保障体制から脱却し、新しい安全保障体制へ移行する動きを見せている。しかしその反面、現実はいまだ冷戦期の安全保障の枠組みを完全に取り払うことができず、東アジアでは旧来依然とした安全保障体制が取られてきた。資本主義国と社会主義国という明確な線引きによる主要敵国の想定があった冷戦期とは異なり、現在の東アジアでは、アメリカとの同盟関係を意識した東アジア地域の安定、柔軟で効果的な安全保障体制の構築が課題となっている。では、この東アジア地域における安全保障課題に対してどうアプローチできるのか。国際情勢がますます複雑化、不安定化する現在にあっては、この問題を無視して東アジア地域の平和を語



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE - TOKYO, JAPAN

することはできない。多様な歴史的背景や政治体制、さらには思想が存在する東アジアの姿をより忠実に把握した上で、今後の安全保障体制を考えていくことが求められる。

このような認識の下、当分科会では安全保障に関わる国際関係の理論を理解し、地域の安全保障問題を多角的な観点から捉えることを試み、最終的に東アジアにおける安全保障および平和維持のあり方を検討していくことを目的とする。その過程として、東アジア地域の安全保障を考える上で重要な4つの課題、すなわち①冷戦後の東アジアにおけるアメリカの役割、②日本の外交政策、③中国の台頭、④地域統合としてのASEANにそれぞれ焦点を当て分科会を構成していく。

<スピーカー>

国分良成 (慶應義塾大学法学部政治学科教授)

Thomas J. Christensen (プリンストン大学教授)

David Kang (ダートマス大学教授)

Pan Wei (北京大学教授)

李秀赫(Lee Soo-hyuck) (前外交通商部次官補、六カ国協議韓国前代表、駐独韓国大使)

Ong Keng Yong (ASEAN 事務局長)

田中明彦 (東京大学東洋文化研究所所長)

藤原帰一 (東京大学大学院法学政治学研究科教授) 他

分科会 2 – Trust

<テーマ>

「信頼」はどのように構築されるのか。互いに関係を有しているにもかかわらず信じあっていない者同士がいかに「信頼」関係を構築することができるのか。この分科会では、アジア地域で個人間、市民と国家、国家間で生じている「信頼」構築に関わる諸問題を検証する。そして、それぞれの次元で「信頼」がどのようにして構築されているか、あるいはどのような場合に「信頼」が構築されないのかを具体的なケースを通じて考えていく。分科会では、まず、「信頼」という概念を通じて民主主義と市民社会について考える。次に、中国や韓国などアジア各国の具体例をとりあげる。具体的には、中国におけるエリート間の権力移譲、ローカル・レベルの選挙や政府批判などの大衆運動(天安門事件)、韓国におけるインターネットでの他者との関係構築などを扱う予定である。また、「信頼」の構築における法律の役割について、特に個人間及び国家と市民との間の次元において検討する。さらに、「信頼」構築のチャンネルとして、ビジネスの慣習や言語コミュニケーションの問題も取り上げる予定である。世界がますますグローバル化し、国家間、個人間、国家と個人との間の関係性が複雑化してきている今日において、「信頼」関係をいかに構築していくことができるかは大きな課題である。今、「信頼」という観点からアジアの諸問題をもう一度見つめなおすことは、我々にこれからのアジアをつくる新たな視点を与えてくれるだろう。

<スピーカー>

Russell Hardin, New York University

Susan Pharr, Harvard University

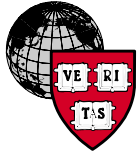
Roderick MacFarquhar, Harvard University

Li Lianjiang, Hong Kong Baptist University 他

山岸俊男 北海道大学文学部行動システム科学講座教授

分科会 3 – Higher Education

<テーマ>



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE – TOKYO, JAPAN

当分科会では、「東アジアにおける大学の公的役割」をテーマにして、主に変わりつつある高等教育の役割と東アジアの大学の社会的な使命について考察する。分科会の主軸を成すディスカッションでは、グローバル化と東アジアの社会政治的背景の変化を考慮しながら、公的機関としての役割を担うはずの大学が、どのようにしてグローバル化・民営化に立ち向かっていくべきかを考察する。はじめに、東アジアでも特に国際的に影響力を持つ香港大学学長をスピーカーとして招き、現在「教育」が直面している現状やそれに対する革新的な取り組み、さらには各地域における高等教育の打破すべき課題についての講演を予定している。続いて、講演の内容を踏まえ、少人数のグループでディスカッションを展開し、高等教育の将来へのロードマップのプランニングを行う。

参加者一人一人が、現在の東アジアにおいて高等教育が直面する複雑かつ重大な問題を主体的に考えるだけでなく、参加者同士が協力しあい、東アジアの大学の社会的使命を新しく創り出し、発信していくことこそがこの分科会の目的なのである。

<スピーカー>

Prof. Kai-Ming Cheng (香港大学学長)

Ong Keng Yong (ASEAN 事務総長)

有馬朗人 (東京大学名誉教授、元文部大臣・科学技術庁長官・東京大学総長)

金子元久 (東京大学大学院教育学研究科・教育学部教授)

分科会 4 – Healthcare

<テーマ>

本分科会では、先進国・途上国双方が取り組んできた、従来からの病気（心血管疾患、癌など）、近年途上国を中心に新たにみられる感染症に対する医療システムを議論する。各国の様々な医療システムの構造の特徴を捉え、患者、医師、保険会社等の相互作用、規制実施機関としての政府の役割に焦点をあてる。各国間には人口動態や社会経済状況、及び健康に対する関心には様々な差異が認められるものの、先進国・途上国それぞれにおいて医療システム・医療インフラの改革が課題となっている。それは、我々が、今後起こりうる地球規模の悲劇の傍観者とならないためにも、肉体的な健康に加え社会全体の安寧のために、真剣に進めなければならないのである。

<スピーカー>

Ian Gust (Director of the WHO Centre for Influenza in Australia, Melbourne University Professor of Medicine)

Jeroen Dowes (Massey University Wellington)

Jenny Su (Taiwan)

Audiey Kao (American Medical Association)

Louis Yen (Michigan)

田代真人 (国立感染症研究所ウイルス第3部部長)

Edison Liu (Executive Director of the Genome Institute of Singapore)

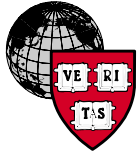
坪井栄孝 (日本医療機能評価機構理事長、日本医師会元会長)

黒川清 (日本学術会議会長、東京大学先端科学技術研究センター教授、東海大学総合科学技術研究所教授、東京大学名誉教授)

分科会 5 – Migration

<テーマ>

人的ネットワークと労働力の移動という視点から、グローバリゼーションを考えることが、この分科会の目的です。アジア系移民の歴史は少なくとも 16 世紀にまでさかのぼりますが、今日の人の



移動はこの移住の歴史の一部として捉えることができます。アジア系移民の歴史は、「グローバリゼーションは現代的な現象である」という主張に対する、強力な反証と言えるでしょう。

移民やそのネットワークを考察することによって、個人のアイデンティティ、経済、イデオロギー、そして文化システムといった事象が、複雑に絡み合っていることが明らかになります。また、移民の役割は、グローバリゼーションの進展に伴って重要性を増していると考えられます。そこにはどのような課題や可能性があるのかということをこの分科会では考えていきたいと思います。

<スピーカー>

Adam McKeown (コロンビア大学)

Michel LaGuerre (カリフォルニア大学バークレー校)

Evelyn Hu-DeHart (ブラウン大学)

Peter van den (ユトレヒト大学)

駒井洋 (中京女子大学)

井口泰 (関西学院大学)

関根政美 (慶応大学法学部)

山神進 (立命館アジア太平洋大学)

分科会 6・Art

<テーマ>

「コンテンポラリーアート(現代美術)って、わからない」という人は少なくありません。しかし、コンテンポラリーアートは難解なものではありません。作品一つ一つは、わたしたちの周りにあるさまざまな社会や環境と関係しています。またそれらは、グローバル・カルチャーの影響を受けながら、同時に個々の国の状況が反映されたものとして受け入れられています。今回のワークショップでは、こうした「アジアのコンテンポラリーアート」の現状を、以下の論点を軸に、考えていきたいと思います。

- ・ コンテンポラリーアートってなに? → Session1、Session 2
- ・ 消費文化におけるコンテンポラリーアートの動向 → Session3
- ・ コンテンポラリーアートに関わる組織（美術館、ギャラリー、トリエンナーレなど）の今 → Session4,5,6
- ・ アーティスト・トーク → Session8

<スピーカー>

富井玲子 (美術史家、インディペンデント・キュレーター)

林道郎 (美術評論家 上智大学助教授)

グスタフ・イスカンダー (キュレーター、インドネシア)

ジョナサン・ナバック (アートバーゼル代表)

ジェレミー・ウィングフィールド (コートヤードギャラリー・ディレクター、北京)

デービッド・エリオット (森美術館館長)

フランク・エルスワース (ジャパン・ソサエティ理事長)

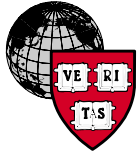
ル・ジエ (キュレーター、北京)

チアップ・ガウィーウォング (キュレーター、バンコク)

リッチ・ステレイトマター＝トラン (アーティスト、ホーチミン)

塚本由晴+貝島桃代 (アトリエ・ワン、建築家)

4-2. ビジネス会議の主な内容



Panel A: バリューチェーンの発展

企業がバリューチェーンを発展させるためには、アジア各国の経済の成長段階を考慮する必要がある。日本の例に見られるように、アジア各国は類似の成長サイクルを経験してきているといえる。その成長サイクルとは、①製造やサービスの外注先としてスタートし、②魅力的な消費市場を徐々に形成するにいたり、③最後に自国発のブランドを輸出するようになる、というものである。現在のアジアには、こうした各段階の経済が共存している。国際経済の中において、アジアの先進国・発展途上国、それぞれの経済は、現在どのようなポジションに位置しており、今後その役割はどのように変化をしていくのだろうか。成熟国家である日本は、これまでいかに発展を遂げてきたのであろうか。また、中国は近年の経済発展を継続させて順調な成長サイクルを歩んでいけるのだろうか。

<パネリスト>

藤原弘 (日中経済協会)

岡本伸一 (米 Logitech 社、元 Sony Computer Entertainment)

浦上清 (浦上アジア経営研究所 元日立製作所)

Mark Wall (CEO of GE Plastics Japan)

Panel B: ラグジュアリーグッズ

世界の高級品市場の興隆は、日本と中国の成長に支えられている。この数十年間、日本企業はいくつかのオリジナルブランドを育て、ニューラグジュアリーマーケットを開拓してきた。その中のいくつかは国際市場で名声を勝ち得ている。また、近年富裕層の拡大にともない、中国市場は国際的高級ブランドにとって魅力的な市場になったが、模倣品市場の拡大が高級品市場に影を落としている。模倣品に対する対応策、およびニューラグジュアリーマーケットの台頭を踏まえつつ、今後のラグジュアリーマーケットの展望について議論していく。

<パネリスト>

Theodore Bestor (ハーバード大学)

Ian Bickley (Coach Japan)

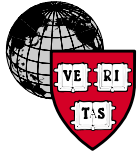
Peter Cheung (香港特別行政区知的財産部)

Paul Husband (Husband Retail Consulting)

Gabriele Waniek (Frey Wille(HK) Ltd.)

Panel C: 金融サービス

新興国の経済発展、とくに、古いファイナンシャル・プラットフォームの基で金融以外の側面を発展させてきたアジアの国々には金融は重大な促進要因となりうる。同時に、中国と日本は莫大な外貨準備を蓄積し、世界経済と金融の繁盛との連繫を強めてきた。さらに、世界経済における重要性が向上し、現地企業のコーポレートガバナンスも改善しているため、アジアは海外資本にとって、リスクでありながら、望ましい標的となっている。ただし、外国のプライベート・エクイティとベンチャー・キャピタルがこういった地域で事業を展開しようとした際に、より豊富な資金を持ち、アジア市場をより理解している現地競合相手と対面し、熾烈な競争が繰り広げられる。無論、公正のように見える市場で投資しようとする国内投資家にとっては、ファイナンシャル・システムの発達もきわめて重要な課題である。アジアの広範囲な経済発展につれて登場してくる新たなチャレンジャーに対して、機関および個人投資家はいかに対処するだろうか。アジア地域全体において、海外資本配分の趨勢は何だろうか。東アジア諸国が投資家のポートフォリオに組み込まれることは、それぞれの国のビジネス環境にどのような影響をもたらすだろうか。こういったダイナミックなフ



Harvard Project for Asian and International Relations

2005 HOST COUNTRY ORGANIZING COMMITTEE - TOKYO, JAPAN

ファイナンシャル・リレーションシップは、アジア経済発展にどのような意味合いを持っているだろうか。

<パネリスト>

河合正弘（東京大学、モデレーター）

大塚澄雄（大和証券 SMBC 国際金融部長）

Haruyasu Asakura（The Carlyle Group Japan）

キャシー松井（ゴールドマン・サックス証券会社）

Anthony Miller（Ramius Capital Group）

Panel D：ブランディング

ブランディングは商品の差別化を図るための本質的かつ重要な要素となっている。このパネルでは日本及び他のアジア地域におけるブランディングの発生や成功、その文化的な側面を議論する。特に、アジア各国における新興ブランド、ブランドの創出、日本のカルチュラルブランディングを中心に深く議論する。また、その浸透を取り巻く文化的な側面について議論する。

<パネリスト>

久保雅一（小学館）

Douglas McGray（ジャーナリスト）

前刀禎明（アップルコンピュータ）

杉浦勉（丸紅経済研究所）

Panel E：自動車

この数十年で日本や韓国の自動車メーカーは顧客密着型の販売促進や革新的な製品を武器にして、GM等の欧米の巨大自動車メーカーを凌駕するほどの競争力を構築するに至った。しかし、これらの企業にも注意しなければならない要素は存在する。その一つは、中国の自動車メーカーとの協調と競争のバランスを保つことである。もう一つの注意しなければならない要素は、莫大な需要が存在する中国をはじめとするアジア市場と世界市場とのバランスを保つことである。このパネルではこのようなダイナミックな市場における各国の自動車メーカーの新たな発展や困難に迫りたい。

<パネリスト>

伊佐山建志（日産自動車副会長）

金田新（トヨタ自動車専務）

Richard Katz（オリエンタル・エコノミクス誌上級編集者）

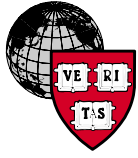
Hans Tempel（ダイムラー・クライスラー日本代表取締役社長兼最高経営役員）

James Treece, (Automotive News)

Panel F：テクノロジー（コミュニケーション&IT）

先端技術を使用する製品に関するサプライチェーンは近年アジアに移行してきている。半導体やディスプレイといった電子部品の多くは台湾・韓国・中国で生産されており、電子部品の例だけでなく、生産面で中国に依存している企業は多い。家電で国際的な分業と技術開発を進めてきた日本を含むアジア各国は、3Gネットワークを利用した音声・データ・コンテンツの送受信サービスに関する技術革新においても、最先端の域を走っている。このようなトレンドは、アジアの、そして世界の技術動向に何をもたらすのか。また、この領域に関する競争と協調に関する展望はいかなるものなのか。これらのテーマについて議論を深めていく。

<パネリスト>



James Haensly (Avaya Asia Pacific)
Stu Lipoff (コンサルタント)
Cecilia Melin, (Asian Investment Partners)
夏野剛 (NTT DoCoMo)
千本倅生 (eAccess)

ケーススタディセッションー1

「フレッシュネスバーガー—成熟市場における後発企業の参入戦略—」

日本のハンバーガー市場は、デフレ経済の長期化等により 2000 年以降成長が伸び悩んでいる。圧倒的な低価格戦略で一時は「ひとり勝ち」といわれた日本マクドナルドですら、価格政策の修正が逆効果となり、創業以来の大幅な収益悪化に直面している。もはや成熟した観のあったこの市場に、1990 年代、最後発チェーンとして現れたのがフレッシュネスバーガーである。同社は「手作り感」「おいしさ」を武器にするとともに、創業者の作りたて弁当事業での経験を活かしたオペレーションのローコスト化により、創業以来、緩やかながら収益拡大を続けている。フレッシュネスバーガーの参入・成長・多角化戦略を考える。

ケースリーダー： 米倉誠一郎（一橋大学イノベーション研究センター教授）

ケーススタディセッションー2

「インテック—変革を企業体質に—」

インテックは富山県に本社を置く総合サービス企業である。1964 年の創業以来、各地域における地元密着サービスに努めると同時に、各地域の分権化と機能の集約化とのバランスをとりながら業容を拡大し、全国規模の通信事業を展開してきた。ところが、バブル崩壊後 1992 年に初めて減収減益となり、そこで社長に就任した中尾哲雄氏によってインテックの第二創業期が始まった。中尾社長に主導された社内改革と新技術・新事業開拓の成果によって、現在、インテックは IT コンサルティング、システム・インテグレーション、ソフトウェア開発など、さまざまな事業を国内にとどまらずアジア諸国などにも展開し、安定した業績を上げている。その環境下、会長兼 CEO に昇格した中尾氏は、富山に本社を置く地域企業としての強みを生かしながら、変化が激しく先行きが不透明な情報通信市場でのさらなる飛躍を目指し、「変革を企業体質に」をビジョンに打ち出した改革を進めている。今後、インテックは時代の変化の中で何を継承し、何を変革していくべきだろうか。

ケースリーダー： 国領二郎（慶應義塾大学環境情報学部教授）

以 上